



マイベストTV賞グランプリのNHK「ハゲタカ」受賞インタビューを受ける主演の大森南朋さんと演出の友成啓史さん



代表してトロフィを受けた大森南朋さん



視聴者プレゼントと握手



テレビ部門特別賞はフジテレビ「Dr.コトー診療所」制作チーム
脚本の吉田紀子さん、演出の中江功さん、プロデューサーの増本淳さんと塚田洋子さん



テレビ部門優秀賞
(左から) テレビ熊本の本田裕茂さん、テムジンの鐘川崇仁さん、NHKの訓覇圭さん



DJパーソナリティ賞に輝いた久米宏さん



清水英夫会長から大賞トロフィが贈られたNHK「ワーキングブア」ディレクターの板垣淑子さん



「ワーキングブア」制作陣の皆さん

44回目のギャラクシー賞贈賞式が、2007年5月31日、東京恵比寿ガーデンプレイスのウェスティンホテル東京・ギャラクシールームで開催された。全国から集まった放送、広告、芸能関係者約600名の見守る中、視聴者の投票で選ぶ「マイベストTV賞」初のグランプリにトロフィが贈られた。テレビ、ラジオ、CM、報道活動の大賞、優秀賞が選出、発表され、喝采を浴びた。

CM部門

表彰はCM部門からスタートした。今期、CMの参加数は三四八件（シリーズ含む。延べ五三六本）。

今年度の大きな特徴は九州地区の強さだ。入賞一三本中四本が九州もので、いずれも福岡の制作会社ビデオストーリーシヨんキユーが名を連ねている。

優秀賞二本は、メディアリテラシーをコミカルに説いてみせた日本民間放送連盟「CMって何？」と、匿名性の言葉の暴力を映像化した福岡市・福岡市教育委員会のインターネットによる人権侵害「黒板篇」が選出された。

大賞は、福岡ソフトバンクホークス「コーチな人々」が選ばれた。地元球団をトコトン愛するファンの気持ちにほほえましく描かれたシリーズCM。ファンの独善的なコーチぶりが笑いを誘い、文句なくおもしろいCMと審査員は太鼓判。大賞トロフィを手にした福岡ソフトバンクホークスマーケティング執行役員の森下良吉さんは「この賞を（優勝への）バネにしたい」と意欲をにじませた。

ラジオ部門

DJパーソナリティ賞は久米宏さんに贈られた。ラジオは二十一年ぶり。かつて「土曜ワイドラジオTOKYO」でギャラクシー賞を受けている久米さん。古巣ラジオで、当代きってのしゃべりの天才が再び水を得た。

「仕事は当分やめようかと思っていたのが、こういう賞をもらうと外堀を埋められた感じがしないでもない」とジョーク交じりにコメント。ラジオの将

第44回 ギャラクシー賞贈賞式

テレビ、ラジオの作り手たちから「もっともほしい賞」に挙げられるギャラクシー賞。その四十四回目の祭典が多く人の放送関係者を集めて、華やかに開催された。

ギャラクシー賞最大の特徴は、放送批評懇談会正会員で構成される選考委員が日々の放送から優秀作を見つけ出しているところにある。数ある番組賞の中でも、このような手間のかかるシステムを持つのはギャラクシー賞だけ。選考は一年がかり。多くの制作者の信頼を集めるのも、そうした理由によるところが大きい。

そのギャラクシー賞に今年、新しい顔が加わった。視聴者の投票によって選ばれるマイベストTV賞だ。視聴者の番組への評価の声、感動の気持ちを形にして、制作者に直接伝えたい。そんな想いから、マイベストTV賞は誕生した。贈賞式では初めてのマイベストTV賞グランプリが表彰される。そしてテレビ、ラジオ、CM、報道活動の入賞作品が表彰され、各部門の大賞・優秀賞がこの場で発表される。作り手たちの期待と緊張が高まる中で、式の幕が切って落とされた。



テレビ部門個人賞は篠原涼子さん



CM部門大賞に輝いた福岡ソフトバンクホークス「コーチな人々」。大賞トロフィを掲げる福岡ソフトバンクホークスマーケティング執行役員の森下良吉さん



CM部門優秀賞 電通の澤本嘉光さん、福岡市の川崎史果さん

報道活動部門優秀賞
長崎文化放送の大嶋真由子さん、毎日放送の松下宗生さん

報道活動部門大賞のトロフィを受ける鹿児島読売テレビの蛭川雄二さん



ラジオ部門大賞を受賞した毎日放送「特集1179～談合」インタビューを受ける森崎俊雄さん

ラジオ部門優秀賞
(左から) ニッポン放送の森田耕次さん、山梨放送の山田歩さん、TBSラジオの三条毅史さん

来について聞かれると、「ラジオは一旦、落ちるところまで落ちたと思うので、これからは上向き。心底そう思います」と言葉強くエールを送った。

続いて番組表彰が始まった。今期の参加作品は七十二本。入賞八作品の中からニッポン放送「夢叶う日まで」、山梨放送「沈黙のラジオ」、TBS「ストリーム」が優秀賞に。「夢叶う日まで」は八年前の割り箸事故裁判を追ったドキュメントの秀作。「沈黙のラジオ」は音が命のラジオで沈黙に注目するという逆転の発想が秀逸な作品。「ストリーム」はネタ満載でイキのよい今一番勢いのあるワイド番組として評価された。

注目の大賞には、毎日放送「特集1179」談合・その根深さを探る」が輝いた。番組は夜八時のレギュラー。密室の犯罪「談合」を生々しい現場音や官僚OBの証言で傑作ドキュメンタリーに仕上げた毎日放送制作陣。記者の森崎俊雄さんとプロデューサーの大谷邦郎さんは「毎週伝えたいことがいっぱい」と更なる気概を見せた。

報道活動部門

今年の参加本数は二十七本で、このうち六本が表彰を受けた。優秀賞二本は、長崎文化放送のチャイルド21「食育」と毎日放送「検証・同和行政」キャンペーンに贈られた。そして大賞は、数々のスクープと地道な報道で冤罪を告発した鹿児島読売テレビ「志布志事件をめぐる一連の報道」に決定した。

受賞に立った制作部副部長の蛭川雄二さんは、「判決前に冤罪と報道する

台に強固なチームワークが生み出した現代の名作。脚本の吉田紀子さん、演出の中江功さん、プロデューサーの増本淳さんと塚田洋子さんが登壇。「家族と別れの盃を交わすくらい決意のいる作品」(中江)、「真摯に向き合うばかりに一年中コトー先生のことばかり考えていた」(吉田)などのコメントから、スタッフにとってもいかに重みのある作品であるかが伝わってきた。

個人賞は、俳優の篠原涼子さんに贈られた。クールな女刑事、スーパー派遣OL、崖っぷちの厄年女など、個性的キャラをナチュラルに演じる、旬の女優」だ。

「理想の女性上司」さながらのクールなパンツスーツで登場した篠原さん。そう言われることについては、「嬉しいんですが、私生活もプレッシャーで変な格好しては歩けない」と期待を裏切れない心境もチラリ。クリスタルのトロフィを胸に、「トロフィに恥じない仕事をしたい」と抱負を語った。

テレビ部門

最後を飾るのはテレビ番組表彰。二〇本の参加作品から選び抜かれた十四本に賞状が贈られた。

優秀賞は、テレビ熊本「断罪の核心」元裁判長が語る水俣病事件、テムジン制作NHK・BS放送「民衆が語る中国・激動の時代」文化大革命を乗り越えて、NHK土曜ドラマ「ハゲタカ」の三番組に贈られた。

テレビ熊本の本田裕茂さんは、元裁判官への交渉は「電話を使わず手紙で番組の思いを訴えて出演をお願いし

のは勇気がいった。信念を貫いてよかった」問題究明はまだ終わっていない。地元局の視点で追いつけたい」と決意を新たにしたい。

坂本衛報道活動部門委員長は「地方局、CATV局が身の丈にあった誠実な報道活動を続けていることを高く評価したい」と講評で結んだ。

マイベストTV賞

視聴者は初のグランプリにNHKドラマ「ハゲタカ」を選んだ。贈賞式には、主演の大森南朋さんと演出の老友啓史さんが登場。マイベストTV賞のプレゼンターは、グランプリ投票に参加した視聴者の中から選ばれた木村雅美さん・埼玉直也。木村さんから大森南朋さんにクリスタルのトロフィが贈られると、会場からはひととき大きな拍手が起こった。

放送批評懇談会のWEBサイトには、「キヤスティングもストーリーも音楽も映像も文句なし」「大森南朋をはじめとした俳優の目で見せる演技がすばらしかった」「行間を読ませ、緊張を持続させる手法が新鮮」「社会派ドラマでエンタテインメントを作り上げたスタッフとキャストに拍手」など賞賛の声が多く寄せられている。大森南朋さんは「現場は緊張感があって、これが(視聴者に)伝わったんじゃないか」と主演作に満足げだった。

特別賞 個人賞

テレビ部門の特別賞は、フジテレビジョン「Dr.コトー診療所」シリーズ制作チームに贈られた。南の孤島を舞

た」と出演への道筋を語った。テムジンの鐘川崇仁さんは「中国の人たちには文化大革命への溢れる思いがあった」と取材を振り返った。マイベストTV賞との二冠となった「ハゲタカ」。プロデューサーの訓覇圭さんは「主人公に不気味な味を出したかったので、主張しすぎない大森さんの演技が最高だった」と語った。

大賞の名前は委員長自身が発表する。音好宏テレビ部門委員長は、「捏造事件なども起こしたが、一年を振り返ってみればテレビが社会力を見せた年といえる。受賞作品を総括すると、地方局の骨太のドキュメンタリーの健闘がたいへん目立った。そして局の失敗を番組で取り返そうとNHKが奮起した。そんな中から、タイトルそのものを時代のキーワードに押し上げた番組に大賞を贈りたい」としてNHK「ワキキングプア」動いても働いても豊かにならない」の名前をあげた。

大賞のトロフィを受け取った板垣淑子さんは「不祥事で視聴者との距離が出来て、取材では難しい局面に何度もぶつかった。この受賞で伝えたいこと、伝えなくてはならないことにこだわっていける」と胸中を語った。番組キャスターの鎌田靖さんは「週刊こどもニュースの」お父さん」として、貧困を次の世代に引き継いではいけないと思いつながってき」と語った。プロデューサーの春原雄策さんは「まだ提案も通っていないし予算もついていないのですが……第三作を今年中に出来ればいいと思っています」と宣言。満場の喝采を浴びた。